

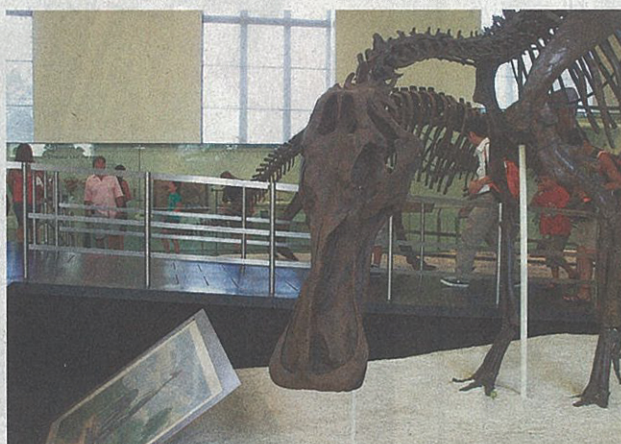
名古屋に自然史博物館を

浅原 正和

日本有数の都市として繁栄する名古屋。歴史ある街には再開発とともに高層ビルが林立し、リニアの開通も八年後に迫った。そんな尾張名古屋にも一つ欠けているものがある。それは、「自然史博物館」である。

名古屋には歴史の教育研究を行う市博物館や、科学技術を扱う市科学館がある。しかし、生物多様性といった自然とその歴史を教育研究する「自然史博物館」は無いのである。世界の大都市ではロンドンの自然史博物館や、ニューヨークのアメリカ自然史博物館など、化石や鉱物、動植物の標本を収蔵・展示する自然史博物館が一等地に並び、社会教育や研究活動の拠点となるだけでなく、観光名所となっている。

アメリカ自然史博物館の展示風景
＝米ニューヨークで（筆者撮影）



あさはら・まさかず＝愛知学院大教養部講師。1982年生まれ。カモノハシを含む哺乳類の歯や頭骨の形態進化を研究している。

東海四県を見ても、静岡市と愛知県豊橋市には自然史博物館が、津市と岐阜県関市には相当する機能を担う県立博物館がある。その中で、名古屋と周辺がぽっかりと空白地域になっている。

江戸時代、尾張国は「尾張本草」と呼ばれる、自然を研究し、さまざまな博物画（動植物の精密な絵）を残す活動の一大中心地であった。そのような世界に誇るべき伝統があるにもかかわらず、現状では周辺地

教育研究を発展の核に

域に対して、文化・学術の面で水をあけられているのである。

自然史博物館があれば、名古屋市の自然環境に関する社会教育や研究活動、保護活動を行う中核となることができる。あるいは、アートやデザイン分野の人々が生物などの自然物の造形からインスピレーションを得ることや、バイオミミクリー（生物の構造を工学に応用する手法）の推進といった製造業への波及も期待できよう。しかし、現在は周辺の自然を象徴する貴重な標本資料が他地域の博物館に寄贈され、散逸するという現象が起こつてしまっている。

二〇一〇年に名古屋でCOP10（生物多様性条約第十回締約国会議）が開催された折、市は「なごや生物多様性センター」を設立した。しかしながら、その機能は限定的であり、資料の

収集や社会教育において博物館に匹敵する役割を果たすことはできない。

現在、金山駅前の名古屋ボストン美術館跡地の利用方法が市で検討されている。このような市の資産を有効活用し、周辺県や豊橋市にも無いような新たな自然史博物館をつくれたいものだろうか。自然史博物館を設立するとすれば東海地方で最後発となるものの、だからこそ新機軸を取り入れることも可能である。都市型博物館としては、東京駅前で東京大総合研究博物館と日本郵便が運営するインターメディアテクが参考になるだろう。都心での展示に特化しているという点では、名古屋ボストン美術館に近い施設といえる。

尾張本草学の伝統と、名古屋ボストン美術館の精神を受け継ぎ、アートと自然史の要素を融合させた施設にすることも検討する価値がある。もちろん、限られた延べ床面積でできることは限られるため、生物多様性センターを含む名古屋市の周辺の動植物園や水族館、大学、研究所といった関連機関との連携、サポート体制が重要となるだろう。

一方で、資料の収集と保管、そして展示の機能を担う博物館はこれら既存の施設の力を引き出す核ともなりえる。これからの時代は知識集約型産業の比重が高まり、文化や学術の力が都市圏の発展に重要な時代と

なるだろう。その一翼を担う施設として、自然史博物館は大きな役割を果たせるに、市は自然史博物館を設けなくてはならない。この地域が二立すべきであると考ええる。

なるだろう。その一翼を担う施設として、自然史博物館は大きな役割を果たせるに、市は自然史博物館を設けなくてはならない。この地域が二立すべきであると考ええる。